慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治の社会主義(3)
Sub Title	Socialism in the Meiji era (3)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1977
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.70, No.1 (1977. 2) ,p.37- 50
JaLC DOI	10.14991/001.19770201-0037
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19770201-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治の社会主義(3)

飯田　鼎

(1) 堺利彦・森近運平「社会主義綱要」について
(2) 思想としてのアナーキズムと理論としてのマルクス主義
(3) 明治の社会主義——その理論的混乱

(1)

わが国におけるマルクスについての認識は，すでに1890年代にはじまるといわれる。しかしそれが紛れもない革命思想として意識されたのは，1900年代である。明治37年（1904年），幸徳秋水と堺利彦は，「平民新聞」第53号（明治37年11月13日号）に「共産党宣言」を訳載し，さらに堺利彦は，「社会主義研究」第4号（明治39年7月5日号）に，エンゲルスの「空想から科学への社会主義の発展」を訳載している。こうした訳業は，いうまでもなく，幸徳の「社会主義神髄」（明治36年）や片山潜「我社会主義」（明治36年）をすでに背景としてもっていたけれども，運動の思想的基調としてはアナーキズムであった。それにもかかわらず，理論的には，その基礎は，マルクス主義におかれていたことが注目に値する。まさに理論的な啓蒙期にあたり，アナーキズムとマルクス主義の相違が明らかに理解されず，理論的・思想的に未分化の状態にあった。

しかし，堺利彦はすでに，明治37年10月9日付の「平民新聞」第48号に，「共産党宣言について」論じ，その革命的意義を強調している。(1) 日本の社会主義運動史上，記憶すべき足跡を印した堺利彦

注(1) 堺利彦は，明治37年11月，平民新聞が，その創刊第1周年を記念して，幸徳秋水とともに邦訳した「共産党宣言」について，つぎのようにのべている。

「予らともにドイツ文に通ぜざるをもって，英訳によりて重訳したり，英訳は，マルクス氏の友にして，『資本論』の大部を訳せるサミュエル・ムーアー氏の筆になり，原著者の一人エンゲルス氏の校訂を経たるものなれば，最も信拠すべしとなす。しかして予らはまたエンゲルス氏が特に英訳に序せるの一文と同氏の自注とをもここにあわせ訳したり」（「平民新聞」，明治37年11月13日，第53号，堺利彦全集，第3巻95頁）。その宣言の革命的文書としての意義をつぎのように強調しているのは，当時すでにかなり正しく理解されているものとして注目に値しよう。「そもそも『共産党宣言』と称するは，1848年の春，パリ，ロンドンの間における共産党同盟（「共産主義者同盟」のこと……引用者）がその主義政権を発表したものであるが，実はその起草委員たりしマルクス，エンゲルスの二人が，これを機としてその多年蓑いきたりし歴史上，経済上の新学説を発表したものである。しかしここの同盟はついに大いなる効果なくして終わったが，この宣言は長く社会主義の経典として欧米諸国の間に伝唱せられ，今日においては，『東シベリアより西カリフォルニアに至るまで，幾百万の労働者によりて承認されたる共通の綱領』として，深く尊信敬重せられているのである」（「平民新聞」第48号，明治37年10月9日）。

は，明治40年11月，森近運平との共著「社会主義要綱」を公けにしているが，この著作は，わが国におけるマルクス経済学研究史上，きわめて重要であるばかりでなく，幸徳の「社会主義神髄」および片山の「我社会主義」とならんで，明治社会主義史におけるもっとも重要な文献のひとつである。

幸徳等とともに大逆事件に連座して処刑された森近運平[(2)]も，また，当時の水準としてはマルクス主義にたいする深い理解を示し，堺，森近の共著とはいうものの，その内容がほとんど実質的に森近によるものであることは，堺の筆になるその序文からも明らかである。

「吾党の諸同志，迫害と闘い，生活難に忍び，流離困頓の間，猶お其主義を確守して伝道に従事する者，固より決して勘しと為さず，然れども我が森近君の如きは，其の境遇変転の跡，蓋し最も奇なる者の一人なり。

然るに君は又，此の多忙の間に於て，更に社会主義綱要の一書を著す。予只一日の長を以て少しく其議に与る。巻中余が執筆せるは，僅かに最後の一章に過きずと雖も，他の諸章中，予がさきに公刊せる訳著に依れるもの亦甚だ少からず。斯くて，脱稿の後，遂に二人共著の名を以て発行する事となれり[(3)]」。

この書は，第一章社会の経済的基礎，第二章生産方法の変遷，第三章現代経済論，第四章社会主義の主張，第五章社会主義と農業，第六章社会主義と婦人，第七章社会主義と富者（附中等社会），第八章社会主義と戦争，第九章社会主義の反対論，第十章社会主義略史，第十一章社会主義運動の現状，から成っている。この内容は，さきに，堺によって「平民新聞」や「社会主義研究」に訳載された「共産党宣言」や「空想から科学への社会主義の発展」，さらに堺，幸徳共訳「ベーベル・婦人問題の解決」，同「ブラッチフォード・通俗社会主義」などによっているが，当時としては，相当に高い理論的水準を示していた。

「第一章社会の経済的基礎」の冒頭を読んで，直ちに感じられるのは，「狩猟時代，遊牧時代，農業時代，工業時代」という，ドイツ歴史学派にみられる経済発展段階説の認識であり，さらに，マルクス主義の影響である。

「マルクスが其『共産党宣言』中に論じて，『人と人との間には，唯赤裸々の私利，刻薄なる現金勘定の外，何の関係も残さず。彼の宗教的の熱情や，武士的の義侠心や，慈悲愛情の人情の如き，極めて神々しき心酔の状態は，悉く利害打算の冷水中に溺没し去れ』と云へるもの能く現時の情勢を説明して余あり，徒らに物質文明を罵る勿れ，何の世何の処と雖も，人類の物質生活の安固なる基礎なくして文明の発展すべき理由なし。唯其基礎の組織如何に由りて，

注(2)　森近運平については，吉岡金市「大逆事件のもっとも惨ましい犠牲者」昭和35年がある。

(3)　堺利彦・森近運平共著「社会主義綱要」岸本英太郎編，資料「日本社会運動思想史」，明治期，第5巻（片山潜，田添鉄二，森近運平，堺利彦集），青木書店，1971年307-308頁。

精神生活の色彩を異にするのみ。経済的基礎の上に築かれたる所謂精神的文明の各種類各様式について一に考察を遂ぐることは頗る興味ある問題なれども，そは到底一小冊子の能く尽すべきに非ず。吾人は唯だ其一端を示して注意を喚起し置くのみ。マルクス曰く『歴史の各時代に於ては，必ず生産分配に関する経済上特殊なる方法あり。又必然それよりして生ずる社会組織あり。其時代の政治及び思想の歴史は，此基礎の上に建設せられ，又此基礎によりてのみ説明せらるべし』と(4)」。

以上の一節は，史的唯物論を公式化した「共産党宣言」および「経済学批判」に依拠したことが窺われるが，しかし森近が，まさしくこの原典によって，史的唯物論の理解に到達したかどうかは明らかではない。著者は，執筆に際しては，参考文献には一切ふれておらず，従って，これがマルクスの著作に直接どの程度負うているかは明らかではない。当時すでにマルクス経済学および思想についての入門書や啓蒙書が輸入され，かなり普及していたことも考えられるからである。

ともあれ，森近の思想の根底に，マルクスが据えられていたことは明らかである。すなわち，「第二章生産方法の変遷」のなかで，モルガンにふれ，原始共産主義の存在に着目しているのは，その「古代社会」とこれに基本的に依拠して書かれたF・エンゲルスの「家族・私有財産および国家の起源」の認識をみることができる。しかしもっとも注目すべき点は，マルクス経済学にたいするきわめて水準の高い理解である。「第三章現代経済論」は，読者に当時としてはなみなみならぬ経済学的認識を感じさせるであろう。つぎにやや詳細にこの点について考察しよう。まず古典派経済学における価値論について，つぎのようにいう。

「経済学者は物が人間の慾望を満足する程度を名づけて使用価値と云ひ，一物が他物と交換し得べき能力の度を名けて交換価値と云ふ。されば使用価値は物に対する人物の主観的態度にして，之を効用と称すべく，交換価値は交換に当り物と物との比較によりて始めて現はる者なれば，単に之を価格と称して使用価値即ち効用と区別すべし(5)」。

使用価値と交換価値とを区別しているにもかかわらず，交換価値を価格として考え価値との関係を明瞭に把握できなかったことはやむをえないが，つぎの一節はきわめて重要である。

「アダム・スミス及リカードは，物の価格あるいは之を得るが為に人間の勤労を要するに因るとせり。従って其勤労の大なるものは価格大に，其少なき物は価格小なりと云ふ，之を勤労説と称す。マルクスに至っては，更に進んで如何なる勤労が価格を生ずるやを詳論せり。

一物に価格ありと云ふは，其物を採取し，生産するに当りて，人間の労力を要したりてうことなり。換言すれば，其物に含まれる人間の労働の分量が価格の大小を決定する標準なり。而して玆に労働と云ふは，社会的に必要なる労働の抽象的意義を有すと知るべし(6)」。

注(4) 前掲書，311-2頁。
(5) 前掲書，326頁。
(6) 前掲書，326頁。

人間労働の体化としての価値を，森近は使用価値と交換価値の概念とは独立に把握することができなかったとはいえ，スミスとリカードウにはじまる勤労説（＝労働価値説）についてのマルクスの解釈として，「労働と云ふは，社会的に必要なる労働の抽象的意義」とのべているのは卓見である。しかしここでも「市価の高下は波動なり，価格は常に貨物に含まれたる社会的に必要なる抽象的労働なり」として，価値と価格の混同がみられる。結局，人間労働の体化物としての価値を価格と呼び，交換価値と同一視したところに，この時期の経済学研究，とりわけ価値論研究の水準を見出すことができる。従って，森近は，剰余価値を，剰余価格と呼んでいるのである。

以上にみるように，すでに，価値を規定するものとして抽象的・人間的一般労働を考え，つぎに，これによって，賃金をつぎのように説明している。

「賃銀は労働者の労力を生ずる費用に準じて決定す。換言すれば，労力の生産費，即ち労働者の生活に要する物料中に含まれたる社会的労働の分量に依って決定す……。労力も一の商品たる以上は，市場に於ける需要供給の法則に従ふて高下あるを免れずと雖も，賃銀を無限に騰貴せしむべき需要の之あるべき筈なく，又供給が需要に超過して賃銀を引き下ぐる場合と雖も自ら限度ありて敢て突飛なる昇降をなす者にあらず(7)」。

この叙述には，「資本論」にあらわれた賃金学説，いわゆる生存費説についてのほとんど正しい解釈をみることができよう。なおさらに「産業豫備軍」という概念が提示され，労働問題の重要性が，「直ちに是れ人類全体の死活に関係ある一大案なり。之が解決は即ち人類将来の運命を決すべき一大審判の宣告なり(8)」として，その労働問題のひとつは，分配の不平等と失業問題，第二に労働者の賃金奴隷化，第三に婦人及び少年労働の増加をあげ，これらの諸現象が，その結果としてもたらすところのものは剰余価格（＝剰余価値）であるとして，つぎのように主張する。

「果して然らば，資本家の目的たる利益は奈辺より流れ出づるか。答えて曰く，無代価にて労力を使用し，其結果たる価格を収得することにあり。換言すれば，労働者に仕払ひたる賃金よりも大なる価格を生産せしめて，之を資本家の掌中に収むるにあり。労力が創造したる価格より，其労力の代償として仕払いたる価格を控除したる残額を剰余価格と称す」。

注目すべきことは，これにつづいて剰余価値の本質をもって，「蓋し剰余価格は資本増殖の唯一資料たるのみならず，生産的労働に従事せざる一切の人の所得の源泉なり。彼の利子，地代，官吏軍人の俸給等は皆之より仕払はる(9)」とし，さらに，「此剰余価格は，云ふ迄もなく資本家が労力を長時間使用して，其結果の一部を壟断したる者にほかならず」と断定していることであろう。その不労所得である理由を強調するとともに，その創出過程を説明し，本質に肉薄している点は，印象的

注(7) 前掲書，330-331頁。
(8) 前掲書，332-3頁。
(9) 前掲書，337頁。

というべきである。

とくに，「此機械の損料と原料及び補助物品に費したる資本額は毫も変更することなくして新商品の価格中に含まるるを以て，之を不変資本と称す。之に反して労力の購入に費したる資本は，労力使用の時間に応じて変動し剰余価格を産出するを以て，之を可変資本と称す。故に今一商品の価格を分析する時は左の如し。

一、不変資本（原料，補助物品，保険料等）

二、可変資本（賃金）

三、剰余価格（無賃労働）

この当時の経済学研究の水準では，マルクス経済学にたいするきわめて洞察力に富む理解といわなくてはならない。とりわけ，現代経済の特色のひとつとして，生産の投機性と市場の攪乱，そしてその結果として，恐慌の不可避性にふれていることである。

「資本家は常に其商品が売却せらるべきを豫期して，事業を営むと雖も，市場の需要は固より無限に増大するものに非ず。之に反して一方信用機関の発達により，資本は急速に融通せられ，機械の助けに依りて労働の効果は極めて大なるを以て，忽ちにして市場は雍塞し交換は停止せらる。是に於て恐慌来の叫声は産業界の全面に響き渡り，銀行は貸出を中止し，諸種の工場は其全部又は一部を閉鎖するに至る。……。労働者は昨日勤勉の報酬として業を失ひ，小資本家は倒れ，商業は沈衰し，消費者は買ふ能はず，生産者は売ることを得ざるの奇観を呈す」[10]。

森近はすでに，世界最初の恐慌として，1825年恐慌を認識し，この周期的恐慌こそは，生産力と生産関係との矛盾の結果であるとして，つぎのように結論する。

「自由競争制度は善く需要供給の調和を保持し，人の慾望は此法に拠って最も善く充足さるべしと，然るに現時社会の状態は，全く之に反する者あるは何ぞや。他なし，生産力が利益を目的とする個人の支配に一任すべく余りに発達したるにあり，之れ即ち資本家制度が既に某終末に近づけるの兆にあらずして何ぞや」[11]。

以上，「社会主義綱要」について，経済学的な観点からみて，重要と思われる部分について紹介を試みたが，この理論的基礎が，「共産党宣言」，「経済学批判」，「資本論」，「空想から科学への社会主義の発展」などに負うていることは明らかである。しかしこれは，明治社会主義史の上に，どのような地位をしめるものであろうか。

注(10) 前掲書，341頁。

(11) 前掲書，343頁。

(2)

以上にみるように，森近のマルクス主義認識は，当時としては異常に高い水準にあったことが推察される。彼が，当時，マルクス「資本論」を読み且つ理解したかどうかは明らかではないにしても，その経済学的理解がほとんど正鵠を射ていたことは疑う余地がない。彼は，どのようにして，そのマルクス認識を深めたのであろうか。

明治39年4月，東京，神田，錦輝館における演説のなかで，彼は，つぎのようにのべている。

「資本家制度も社会進化の過程に於て一度は経過すべき者で，其人類に貢献したことは実に夥しいものであることは知って居りますが，既に尽すべきの本分を尽し終り，最早之以上の人類の進歩に向っては不必要であり，且有害である者を，何時迄も存続させねばならぬと云う理由を知らぬのであります[12]」。

社会進化の過程において，資本主義が人類にとってすでに桎梏と化しつつあることを強調していることは注目すべきであるが，彼の経済学的認識の深さは，「大阪平民新聞」に掲載された通俗講話「賃金の話」において，最高度に発揮されたのである。

まず賃金の形態について，時間賃金と出来高賃金との区別および実物賃金制についてふれ，「払い方で云へば一日何程とか一ヶ月幾円とか云う期間払と，これだけの仕事をすれば幾らという出来高払の二つになり，払う物で云へば米味噌や米類を以れる物品払と，正金で以れる金銭払との二つになる[13]」とのべている。しかし問題は，賃金の本質についての彼の考え方である。「賃金とは人の為めに仕事をして受取る金銭又は物品である」，「賃金は社会の産物の中から労働者が受取る分け前である」，さらに「賃金は労働者に唯一つしかない品物即ち労力の代価である」という主張の如きは，今日ではすでに常識化しているが，「生活費の標準」として，「最低の生活費とは何れ位のものか，貧民窟では兵営や監獄の残飯を食べて居る者が多く，一日五銭位でも命だけは繋げる。が併し，前に云う処の最低生活費は斯様なものではない。先づ労力者が一人，其妻と子供とが倹約して暮して行けるだけの費用の事である。若しこれだけの賃金が取れねば，労働者は結婚することも出来ぬし，自然無理をすることになり，身体は次第に弱って労働者の人類が滅る[14]」（傍点引用者）。アダム・スミスの賃金論を髣髴とさせる一節[15]ではなかろうか。そして結論的に「賃金は労働者の最低生活費に依

注(12) 森近運平「資本家制度の末路」（明治39年6月20日，神田錦輝館における演説の大要），「光」第1巻第15号，明治39年6月20日（資料日本社会運動思想史(5)，青木書店，1971年，454頁）。

(13) 上掲書，456頁。

(14) 上掲書，460頁。

(15) スミスは，労働者の賃金について，つぎのようにのべている。「人間というものは，つねに自分の労働によって生活しなければならないし，また彼の賃金は，すくなくともかれを扶養するに足りるものでなければならない。たいていのばあい，賃金はいく分かはこれ以上のものでさえなければならないのであって，さもない限り，彼は家族を養育することが不可能であろうし，このような職人たちの家系は一代かぎりになってしまうであろう」（アダム・スミス「諸国民の富」，岩波文庫版(1)，大内兵衛・松川七郎訳，227頁参照。

って定まる。全体に生活程度の高い国では高く，非常に倹約する習慣（日本，支那等）では安い」[16]とのべている。

マルクス経済学についての認識は，翌明治40年7月1日から9月5日までの間，大阪平民新聞に掲載された「労力の掠奪」によって一層鮮明な形をとってあらわれたのである。「財産は盗奪なり」というプルドンの有名な文句を引用し，「吾々は，今日の法律が正当と認めて居る財産でも盗んだものだと云う，プルドンの説に賛成である。併し乍ら其金銭なり器械なり，家屋なり船舶なり，それらのものを富豪が直接盗んだものとはいわない。直接に盗めば火鉢の一つでも，パンの一片でも，例え飢えて居る者が命を繋ぐ為にしたことでも法律は之を罪人とする。が，若し総ての財産を作る根本の力，外にない力，即ち人間の労力を盗むならば，相当の方法を以て之を奪い取るならば，法律之を罰せず，道徳は之を咎めぬのである……。今は労力を掠奪することを資本家の権利と認めて居る。それに反対する者を却って盗賊か悪人のように云うのである[17]……」。

プルドンのいうこの「盗奪の論理」，森近のいうところの「労力を盗む方法」については，さらに彼はつぎのようにいう。「人はすべて生活費よりも多くの仕事をするものであるにも拘わらず，労働者の受取る賃金は最低生活費であるから，其余の分は皆資本家の利得になって仕舞う。若し労働者が自身の生産力に相当するだけ皆自身の所得にしようと思ってもそれは無駄である[18]」。ここでの森近の理論は，プルドンとマルクスとの関係を意識していない。われわれはのちに，社会主義思想としては，無政府主義，社会主義理論としてはマルクス経済学という矛盾をみるであろう。

やがて労農派マルクス主義理論として活躍する山川均は，明治40年8月，「資本論」について紹介を試みているが[19]，そのなかで彼は，その紹介を，「サイモンス氏が『労働階級の聖書』と云わるるマルクスの『資本論』」，「サイモンス氏の説に従い，『資本論』第一巻に就て順序を示したるもの」であるとし，また故岸本英太郎教授は，「森近の『社会主義綱要』は，この山川の『マルクスの資本論』を読んだ上で書かれたものであろうか」とのべておられるが，必ずしも明らかではない。

それよりも，すでに社会政策学会のメンバーとして錚々の論客であった福田徳三の「資本論」研究との関係は興味深い。彼はすでに，社会主義思想としてはアナーキズム，社会主義理論としてはマルクス主義経済学という矛盾した立場をとる日本の社会主義運動の動向にたいし，きびしい批判の態度をとっていた。森近の「経済学綱要」は，明治40年11月，東京小石川原町の雞声堂から発行されたが，これより先，福田は，「東京経済雑誌」第138号に，「難解なるカール・マルクス」という一文を発表した。これには明らかに，堺，森近にたいする痛烈な批判がみられる。

注(16) 上掲書，461頁。
(17) 通俗講話「労力の掠奪」，大阪平民新聞，第3号～7号，明治40年7月1日～9月5日，前掲，資料日本社会運動思想史(5)，467～468頁。
(18) 前掲書，470頁。
(19) 前掲書，478頁。

「主義を取り，説を立つる各人の自由なり，唯だ自らマルキストを標榜する以上，マルクスの難解如何に甚しくとも，必ず之に打克つの忍耐と熱とはなからざる可からざるや自明の理。マルクスの社会民主主義を究めて後，自ら意見の啓発し思想の発展して，更に進みたる立場に上る甚だ可。然らず，唯マルクスの一般普及のものなるが為，而も未だ其難解に打克ち能はざるが為め，忍耐と根気とを欠くが為め，新を求め，奇を追うて逸足して奪り去らんとする，断じて事に忠，道に信なる所以にあらず。而して是れが為めに却って累を主義其物に及ぼし，甚しきに至てはマルクスを以て無政府主義の開山開祖なりきとの噴飯絶倒猶お且つ及ばざる盲説呆論の世に伝播して，教育あり，文字あるべき筈たる階級の儕輩を徒らに世界の嗤笑の間に曝らすが如きことあらば，先人を傷うの責如何にして辞するを得ん」（傍点引用者）。

問題は，この論文の末尾に，つぎのようにのべている点である。すなわち，

「事は『共産宣言』の邦訳者氏等が，翻訳の故を以て罪に問われんとしたるに関連し，所謂社会主義の論客が，マルクスの学説を奉ずと主張して，漸く無政府主義の説に変化しつつ行くが如き形勢あるを認め，彼を憤ると共に，此を戒めんと欲して此一文を草せり。其後の出来事は唯だ予の当時憂慮したるものの，豫期せざる程急激の変遷を来したることを明らかにしたり。予は今に至って痛恨の念猶已む能はず。我等読書子元より時務を知らず，然れども世上の先覚者が学問の研究を軽視するも亦余りに甚しからずや。而して其結果は果して如何。予は経世に志ある人士がまず節を屈して，読書生の空論にも一顧を与へんことの，必ずしも無用事ならざるを痛切に感得せざるを得ざるなり[20]」。

以上の一文には，平民社を先頭とする日本社会主義運動にあたかも宿命のようにまつわりついているマルクス主義とアナーキズムとの関係について，平民社同人が，その相違を何ら意識することなく，この両者の矛盾を自覚せず，平然として運動を展開しつつある不合理性を追求したものとして傾聴に値しよう。

福田徳三のマルクス経済学研究は，森近の「経済学綱要」発刊の頃に至って，非常に明確な形をとってあらわれた。しかしながら，福田の日本の社会主義批判は，アナーキズムに傾きつつ，なおマルクス主義経済学の立場をとる幸徳・堺等への有効適切な批判ではあったが，これは，19世紀末，帝国主義段階に達したヨーロッパにおける経済学の研究状況，ならびに帝国主義と労働運動との関連の下で明らかにすることなくして理解されえないであろう。

(3)

日露戦争以後，わが国の社会主義運動は，議会改革を中心とする社会主義を代表する片山潜と田

注(20)　「難解なるカール・マルクス」（「東京経済雑誌」第138号）所収。

添鉄二，革命的サンディカリズムを主張する幸徳秋水やこれと同調する堺利彦の二つの潮流に分れたのであるが，この運動の分裂の背後にあるヨーロッパ社会主義運動の諸矛盾と経済学研究とは，相互に密接な因果関係をもち，日本の経済学の動向に微妙な投影をしていたのであった。

明治20年代初頭におけるフリードリッヒ・リストをはじめとするドイツ歴史学派の導入につづいて，20年代末から30年代にかけての新歴史学派の影響下に，日本社会政策学会を創立した金井延等の経済学は，既にはじまっていた社会主義経済学研究とある種の緊張をはらみ，桔抗対立の関係を維持しつつ，その学派を形成しつつあった。こうした対立を象徴するものとして，われわれは，片山潜と金井延の社会主義にかんする論争に注目しなければならない。

明治31年2月，日本鉄道会社（今日の東北本線）の機関手および火夫が，待遇改善を要求してストライキに入り，勝利を獲得した後，4月，日本鉄道矯正会という企業内の職業別労働者組織を結成した。会社側の再三にわたる妨害的活動にもかかわらず，矯正会は急速に発展し，明治32年初頭には，組合員数約1,000人，積立金約10,000円，この年の暮には，20,000円を所持するに至った。この組合の強固な組織と戦闘的性格に脅威を抱いた経営者側は，明治33年，治安警察法が発布されるや，これを利用して組合抑圧の態度を固め，ついに34年10月，東北地方における陸軍大演習を機会に，組合によるストライキ戦術の危険性を喧伝し，警察権力を背景に，日鉄矯正会を解散させるのに成功した。(21)

ところで，日鉄のストライキの翌月，すなわち明治31年3月，深川印刷会社の職工7名が発起人となり，同社の職工百余名を集めて「懇話会」を組織し，これを中心として広く活版工を入会させるために全力をつくしたが，会社はこれを認めず，主謀者7名を解雇し，この問題をめぐってストライキが勃発した。活版工ならびに一般労働者の強い支持にもかかわらず，争議は敗北し，7名の労働者は，いわゆる黒律（ブラック・リスト）法に付せられ，失職しなければならなかった。(22) この「懇話会」崩壊後，31年8月，「活版工懇話会」が，幾多の妨害にもかかわらず組織され，この年の10月には会員は350名に達した。このような活版工組合の隆盛をみた経営者は，妨害よりもむしろ，その穏健化を図ることにその政策を転換し，そうした意図の下に，「懇話会」は，鉄工組合よりはるかに徹底した労

注(21) 「労働世界」第60号（明治33年5月1日号）は，「治安警察法と日鉄」と題し，「日鉄が斯く傍若無人の振舞をなしたるは彼が兼て望みたる治安警察法を振り廻して労働者を脅迫し，彼等を圧制し，遂に彼等の請求は，治安法内に埋りたり。其手段や周到尽せりと謂ふべし」とのべている。

(22) 「労働世界」は，つぎのように抗議している。

「玆に一人の労働者あり，その労働者が或る事情にて非常に或る資本家に悪まれたりとせよ。此時此資本家が其労働者を痛めんが為め仲間の企業者残らずに一片の檄文を廻し

其労働者は拙者方にて追放致し候に就ては本人何れへ参り候ても決して御傭入相成間敷様致度右同業者一同規約仕り候。

と振れ廻り，全国の営業者悉く腹を合せて件の労働者を傭はざりしとせよ，斯くなる時は件の労働者は日本国中何れの場所を頼りに行きても誰一人として之を傭呉るゝ者なく，此労働者は天にも地にも拠る所を失い，全く生活の路を奪われて路頭に迷はざるをえず。西洋の資本家は時として斯る残酷なる方法を用ゐて労働者を苦しむることあり。之を名けて黒律法即ちブラックリストと云ふ（「労働世界」第11号，明治31年5月1日）。

資調協主義の職能的労働組合として活動することとなった。(23)

「活版工懇話会」の主催の下に，明治31年4月3日，神田，錦輝館において，片山潜，桑田熊蔵および金井延の演説が行われたが，労働組合運動の指導者として片山潜，社会改良主義者金井延との間に，社会主義の本質について論争が展開された。このときの片山は，「調和主義と社会主義」という演説を行い，その要旨は，「片山氏の社会主義」として，「労働世界」に紹介されている。しかしこの演説は，実に金井延によるはげしい批判にさらされることとなったのである。

片山はまず，秀英社において，佐久間貞一がとっている労働者政策を評価し，「労資協調の必要性」を力説し，労資協調は社会主義への途であるとして，つぎのようにのべている。

「私は社会主義と云うものは宜しいと思うのです（拍手喝采）。鉄道は国家が所有して宜いと思う。水道の如きも，既に東京市が所有して居ります如く，一個人よりかまだ社会全体が持った方が宜いと思う……」。

「グラスゴウの市はどういう市かと云うに尤も世界に於て社会主義の行われて居る所である，夫（それ）で私は資本家を撲滅するとは云わないです，決して革命的で世の中のことは進む者じゃないです，社会主義が行わるるのは進化的である，彼の独逸が鉄道を国有として社会主義を応用しましたけれども，独逸の資本家は撲滅されなかった。日本の電信を国有にしたけれども一人も不平を鳴らさないのです……」。

「労働の調和と云うものは何の目的か，一般社会の人民が，平和的に暮らすことが出来ると云うのが目的でしょう。労働問題と云うものは何が目的か，資本家を撲滅するのが目的ではない。凡ての多くの人民が働いて楽に喰うことが出来るようになれば宜いです。……」(24)。

この演説は，おそらく若き日の彼の思想を率直に吐露したものとして興味深いが，労資協調主義を社会主義と等置し，都市自治体の公有化事業をもって社会主義の発現とみなしたことや，あるいはまたドイツ新歴史学派，いわゆる講壇社会主義と社会民主党の社会主義の区別を知らなかったことなど，社会主義認識の上で重大な誤謬がみられたことが特徴的である。これは，彼がその二年前，イギリス旅行の折りに見聞したことをまとめた「英国今日之社会」の内容とも関連するが，ともかく金井延によって，その社会主義認識の杜選さを批判されることとなった。「労働世界」は，同じ席上での金井の演説「社会主義を駁す」の要旨を，「金井延氏の社会主義」として発表しているが，彼はつぎのようにのべている。

「……吾人は片山君の所謂社会主義に反対することこれ也。社会主義なるものは，実に漠然として何処に骨髄がある，吾人は日本国民として之に賛成する能わず。何となれば，社会主義は現今の国家組織を破壊するものなればなり」(25)。

注(23) 「資料日本社会運動思想史」3，青木書店，1971年，293頁（故岸本英太郎氏解説参照）。
(24) 「片山氏の社会主義」（「労働世界」第46号，明治32年10月15日），前掲，資料3，67～68頁。
(25) 「金井延氏の社会主義」（「労働世界」第46号，明治32年10月15日，前掲，資料3，69～70頁）。

金井は，社会主義の解釈においては，欧米の学者間に種々異説があるけれども，要するに社会主義とは，「資本家は資本に対する利子を得，労働者は労働に対するの賃金を得，これ皆私有産の制に基けるもの」であるのに，「然るに社会主義はその組織を破壊し，総て共有産の制度に為さんとするもの也」として，少くとも社会主義にかんして，はるかに明確な社会主義認識をもっていたことは明らかである。

「彼の労働者の為に一大政策を施したる独逸の鉄血宰相ビスマルクすら労働者の利益を謀るに，国家全体の組織を経済組織に根本的解釈を為せり，又独逸の社会党に断然所謂鉄血を以て当れり。何となれば，社会党，社会民政党，又社会共和党なるものは，皆現今の国家組織を打破するを以て終局の目的と為すものなるが故なり」[26]。

金井はここで，ビスマルクが労働者階級を社会民主党の影響から中立化するために採用した福祉政策を認識し，いわゆる講壇社会主義（＝新歴史学派）の支持の下に遂行されたビスマルクの社会政策や産業国有化政策を社会主義から截然と区別している点が印象的である。

「或は曰く，鉄道を国有に，水道を市有なり国有にするは社会主義なりと。然りと雖も爰に一つの区別を立てずんば非ず。社会主義なるものは全体の組織の力あるものを取て，之を公共の事業である，公共の関係を有てるものなりとし，又一個の経営一個人の特領となるものを防がんが為に，公共の利害を以て利害とする国家組織にするが可なりと，これ即ち社会主義なりとす。本よりビスマルクの如きは社会主義には反対なりしも，鉄道国有を実行せし人なり，吾人も之には賛成す，然れ共社会主義という意味には非ざる也。其他の交通機関等に於て，学者政治家等も国有を認める処なりと雖も，此が一つの系統にして，今日の経済組織を根本的に改革するのと，其組織内にある事業につき或る経営につき，これと相似たる方針をとると大いに異なる所以なりとす」[27]。

これにたいし片山は，「労働世界」紙上に，「金井延氏に答う」という論文を発表し，反駁を加えているが，必ずしも充分な説得力をもっているとはいえない。彼は，金井が，本来の社会主義，片山のいう根本的社会主義とビスマルクの社会改良主義の本質を明確に区別した理由を理解することができず，この態度は，明治40年代，幸徳等との論争の過程においても維持されたということができるであろう。

このように，片山においては，社会主義認識こそ曖昧であったとしても，労働者階級の解放が，労働組合を中心とする労働運動によってはじめて実現されるという確信は，まことに揺るぎないものであり，こうした姿勢は，その後，「労働世界」をはじめとする新聞雑誌に続々と発表される論文のなかに容易に読みとることができるのである。そしてその過程で，彼の労働組合および経済学

注(26) 前掲，70頁。
(27) 前掲，70頁。

的認識も次第に深まっていった。

片山の経済学認識は，「我社会主義」にうかがうことができるが，その片鱗はすでに，明治32年，「社会」に発表された論文「日本における労働」にみることができる。彼は，いわゆるトラストの資本主義社会における役割について，相当程度認識していたことが，つぎの叙述から推測することができる。

「……一体ツラストは経済社会に向って色々な変動を来すでございましょう。第一にツラストの出来るに当って，決して全国幾多の資本家が相集まってツラストを拵えるのではない。ツラストを拵えるには沢山あって，十人か二十人位の資本家である。そうして小資本家の事業を奪い取って仕舞う。スタンダードツラストが共同業者を買収し，或は競争して負かし，漸々勢力を得たるは実にツラストの特色を示した者である。一朝ツラストが勢力を得ると段々小資本家を打潰して其工業に於ける其商権を握る。此に至って始めて生産高を自分に適するように極める。又進んで物価を定め且つ比較的に高くする。詰りツラストは如何なる工業も独占事業となし之を維持して行く」[28]。

ここには，資本の集中および集積，独占価格の形成についてのべられているが，とくにトラストが労働問題にたいしてあたえる影響について，

「ツラストの結果として労働者の需要は止むを得ず減ずるなり。……ツラストが一旦出来れば同盟罷工が殆んど無用になって来る。何故なれば一の工場で同盟罷工をすれば，其の工場は直に門戸を閉じ，業を止めて仕舞う。して其受けた注文は他の会社で注文の物品を作る。如何なる種類の労働者も全然同盟罷工とすることは容易に実行すべきことにあらず……。資本家の勢力は日一日と盛大になり，労働者は愈々益々其の競争者が殖え，働口を得るに困難になり，加之尚お此上にツラストが尚お一層之を激烈にするという有様で」[29]。

片山は，当時，きわめて素朴な形ではあったが，トラストの形成，巨大独占体が社会主義にとって有利な条件となしうることを認識した数少い理論家のひとりであった。すなわち，明治35年7月，「労働世界」に発表された「労働問題とツラストの前途」と題する論文のなかで，「吾人が労働問題最終の解決を為すには勢い自由競争発達してツラストとなり，此ツラストは社会主義の下に公有となり，始めて公平なる産業制度を組織し得らるることを信ずればなり」とし，「吾人はツラストの前途を支配する者は資本家にあらず，社会党なり，少数の者にあらず，多数人民なることを信ず」[29]とのべていることに注目しよう。彼の思想の理論的基礎は，マルクス主義であり，それも，ドイツ社会民主主義に媒介されたマルクス主義であったように思われる。そして，この思想は，やがて，明治36年の「我社会主義」となって結実するのである。

注(28) 片山潜「日本に於ける労働」（「社会」第1巻4，5，6号，明治32年6，7，8月），前掲，資料3，102～103頁。
(29) 前掲，資料3，104頁。

これにたいして，幸徳らのアナルコ・サンディカリズムはまことに対照的であった。幸徳の経済学認識は，「廿世紀の怪物，帝国主義」および「社会主義神髄」によくあらわれているが，しかし彼の社会主義運動と思想は，経済学の理論に基礎づけられるよりは，無政府主義に強く影響されることとなった。

わが国の無政府主義運動に影響をあたえた重要な文献として，煙山専太郎「近世無政府主義」があげられなければならない。荒畑寒村は，つぎのように書いている。

「実際，私などが社会主義運動初期の平民社時代に，ロシアの革命運動に関して得た知識といっては，幸徳秋水がデイチの『シベリアの十六年』を抄訳して『平民新聞』に連載した『革命綺談神啾鬼哭』の伝えるナロードニキ〔人民主義者〕の運動や，煙山専太郎の著書『無政府主義』に紹介されたテロリストの事蹟以上には出でなかった」[30]。

煙山は荒畑のみならず，後に大逆事件の主役のひとりともなる宮下太吉や幸徳秋水に影響をあたえたといわれる[31]。早稲田大学に教鞭をとり，無政府主義の本質を，その反対の立場から追求した煙山の著書は，イギリス，フランス，ドイツおよびアメリカなど各国の著者の諸説を引用しつつ，主としてロシア無政府主義の存在を明らかにしようとするものであった。その目次を示せばつぎの通りである。

前篇　露国虚無主義

第一章　虚無主義の渕源

第二章　虚無主義の主鼓吹者

第三章　革命運動の歴史

第四章　虚無党の諸機関

第五章　西欧に於ける虚無党亡命客の運動

第六章　虚無党の女傑

第七章　国事犯罪人の禁獄及西比利亜追放

後編　欧米列国に於ける無政府主義

第一章　近世無政府主義の祖師

第二章　国際党の史的発展

第三章　輓近に於ける無政府主義

目次をみれば明らかなように，ロシアにおける無政府主義の発展を中心に，各国におけるその歴史的系譜を明らかにし，さらに各国政府のこの運動にたいする対策にも言及している。「虚無党の

注(30)　荒畑寒村「ロシア革命運動の曙」岩波新書。

(31)　煙山専太郎編著「近世無政府主義」，東京専門学校出版部蔵版，早稲田叢書，明治35年，明治文献資料叢書，社会主義篇（Ⅲ），明治文献刊，1965年。

女傑」のなかに，ソフィア・ペロウスカヤがあげられているが，彼女の行動が，やはり大逆事件の首謀者のひとり，管野スガに大きな影響をあたえたことは，しばしば指摘されるところである。

明治35年に早稲田叢書の一冊として発刊されたこの「近世無政府主義」は，平民社を中心とする社会主義者に影響をあたえ，その結果は，とりわけ，明治39年6月28日，神田錦輝館でのアメリカからの帰国歓迎会の席上，「世界革命運動の潮流」と題して熱弁を振い，出席者に大きな衝撃をあたえた幸徳の論調にみることができる。

この演説の思想は，やがて幸徳が，明治40年2月5日，「余が思想の変化」（普通選挙に就て），と題し，「平民新聞」第16号に掲載された論文にさらに円熟した形で発展させられているのを窺うことができる。この論説では，マルクス主義はひたすら，ドイツ社会民主党の議会主義政策として考えられ，改良主義としてとらえられている。そして，マルクス主義政党としてのドイツ社会民主党が，議会主義の一般的手段として，普通選挙権を最重要と考えるところから，マルクス主義そのものを社会改良主義ないしは修正主義として理解している。

だが注意すべきことは，幸徳らもまたこれに対立する議会改革派を代表する片山潜や田添鉄二も，経済学認識においてきわめて浅く，その分析要具としての理論と行動の指針としての思想との間には，超えがたい断絶や混乱が支配し，日本の土壌から根ざした社会主義理論を切り拓くことができなかったのである。福田徳三の批判の一面はそこにあったし，河上肇や北一輝のような思想家の苦闘は，彼らの延長上にあったといっても過言ではなかろう。

（経済学部教授）